

ナガサキの危険な聖母マリア・マルヤ：観音、踏み絵、被爆者

Gwyn McClelland, Monash University

みなさま、よろしくお願いいたします。今日は、まず、長崎でのカトリックの記憶を通して、オーラル・ヒストリーのプロジェクトを紹介いたします。このプロジェクトでは、長崎原爆資料館や大学の先生方からアドバイスをいただいてから、12人の被爆者の方々（かたがた）と会いました。2014年から2016年の間に三回日本を訪（おとず）れ、長崎の被爆者にインタビューをしました。¹そして、オーラルヒストリーの方法論に基づき、被爆者の方以外の長崎の浦上の人々にもインタビューをさせていただきました。インタビューを分析した内容は原爆の経験、カトリック集団の苦しみ、原爆の記憶の解釈、そして、被爆者のための談話の構成や和解の難しさを明らかにしました。

本発表では、ナガサキの原爆記念において、被爆者としての聖母マリアがカトリックの暮らす浦上地方でどのようにシンボルとして返ったかを^{こうさつ}考察します。当時、浦上の潜伏キリシタンの間で、聖母マリアはマルヤと呼ばれ、破壊分子や抵抗を表すシンボルとして異なる解釈がされていました。ヨハン・バプティスト・メッツの貼り付けにされたイエスの「危険な記憶」^{がいねん}²（1.2007）の概念を使い、聖母マリアは様々な対象にとって危険な意味があったということを主張します。例えば、潜

¹ Two survivors were interviewed in an earlier project, also with the collaboration of the Nagasaki Atomic Bomb Museum.

² See for example: Johannes Baptist Metz, *Faith in History and Society: Toward a Practical Fundamental Theology* (New York: Crossroad Pub. Co., 2007).

Gwyn McClelland © 24 June 2017, CIR, Tokyo:

Speech text not for circulation, copying, or distribution without permission of the author.

伏キリシタンにとっては違法行為という危険性、長崎奉行にとっては権力への脅威、また、原爆による壊滅の記憶という意味を持っていました。

長崎のキリシタン、あるいはキリスト教徒にとって、時代と共に、聖母マリアのあり方や意味が変わってきたのです。まず、イエズス会がキリスト教を日本に紹介（しょうかい）した後、長崎地域の百姓のキリシタンの間では、マリアは畏敬（いけい）の対象（たいしょう）でした。³ Oka Ritsuko によると、長崎のキリシタンの特徴のひとつは聖母に対して誠実（せいじつ）であることと、子供心のような畏敬（いけい）の念（ねん）を持っていることでした。⁴

Rosemary Ruether というフェミニストの神学者は Mariology, あるいは神学のマリア研究が、神と人間をもちこみ、女性を今までの権力の階層（かいそう）から解放（かいほう）し、新しい人間性のシンボルとして見られる時、Mariology が女性解放（かいほう）のシンボルにもなると主張しました。⁵ もう一人のフェミニストの神学者、Elizabeth Johnson はナザレスのマリアが慢心（まんしん）と絶望（ぜつぼう）に対して危険なものであると指摘しました。彼女は「この精霊を持つ女性の大事な記憶は危険さという性質を持ちます。その危険さは、人々の中に知恵や、抵抗できるという意識を生み、貧しい人、女の人、そして全ての人間が生きられる、正義的（せいぎてき）で平和的な世界を作るという望みや、地球が神の愛（はんえい）の元に繁栄（はんえい）するという望みを作った。」と言いました。⁶

³ John W. O'Malley, *The First Jesuits* (Cambridge; London: Harvard University Press, 1995), p. 76.

⁴ Ritsuko Oka, 'The Motherly Presence of the Virgin Mary in the Local Church of Nagasaki', in *Asia Oceania Mariological Conference* (presented at the AOMC, Lipa City, Philippines: University of Dayton, 2009) <<http://campus.udayton.edu/mary/VirginMaryinNagasaki.htm>> [accessed 4 May 2015].

⁵ Manfred Hauke, *God Or Goddess?: Feminist Theology : What Is It? : Where Does It Lead?* (San Francisco: Ignatius Press, 1995), p. 189.

⁶ Elizabeth A. Johnson, *Dangerous Memories: A Mosaic of Mary in Scripture*, annotated edition (New York: Bloomsbury Academic, 2004), p. 30.

戦後、浦上の被爆者はもう一度マリアの像を^{おおやけ}公にし、原爆の記憶を元に、マリアの伝統的な宗教的な解釈を変え、踏みつぶされた被爆聖母マリアとしました。色々な像のなかで、こわされたマリア像は回りの風景に混ざった遺体のように見えました。カトリックコミュニティの解釈では、マリアは被爆者として、五番目の崩れ、あるいは迫害、を経験し、被爆者として、生き残ったカトリックの代表のようでした。マリアの家といえる天主堂も爆破によって破壊されました。そして、マリアの像にケロイドの原爆の傷があり、まるで浦上コミュニティの被爆者のようだったので、より人間てきな存在（そんざい）になったそうです。ですから、マリアは被爆者の苦しみを引き受ける聖なる記憶として、それまでの弾圧や嘆きと^{つな}繋がれるようになりました。

今日は、潜伏キリシタンの^{きかん}期間に、浦上のマリアがどのように隠され、そして踏み絵として、踏み潰^{つぶ}され、危険なマリア観音に変化してきたのかということを紹介したいと思います。また、物質的なアイコンとしてのマリアが、苦しみと関連付けられ、破壊工作への信仰をサポートしていたのかを考えます。そして、浦上のマリアの色々な意味やアイコンとしての意義を、被爆者のために、そして公共の歴史の中で、話したいと思っています。

マークシルバーが^{しる}記したように、1945年8月10日にとった山畑^{やまはた}ヨウスケの写真は、人々に伝統的なキリスト教のアイコンを思い出させると 생각합니다。⁷日

⁷ Silver's discussion is found in Chapter 8 of *Imag(in)ing the War in Japan: Representing and Responding to Trauma in Postwar Literature and Film*, ed. by David C. Stahl and Mark Williams, Brill's Japanese Studies Library, v. 34 (Leiden ; Boston: Brill, 2010).

Gwyn McClelland © 24 June 2017, CIR, Tokyo:

Speech text not for circulation, copying, or distribution without permission of the author.

本で1952年に初めて出版されたその写真は、右側にある、レオナルドダビンチのマドンナリッタや他のマドンナの絵を思いださせるでしょう。でも、山畑の写真を見た人は、マドンナリッタと違い、てんい^{むほう}無縫な赤ちゃん^{むほう}と母という見方を考え直すかもしれません。長崎の写真を見ると、母と子供のきれいな白い肌を見るだけでなく、黒いしみも必ず見えるからです。この長崎の聖母と赤ちゃんは原子的な違いがあります。血ややけどが子供の顔にあるし、母の顔も黒くなっています。写真家が意図^{いと}しなかったとしても、破壊^{はかい}的な聖なるイメージは、原爆投下の後の長崎の苦しみの中にいた聖母というビジュアルの中に表れています。

そして、オーラルヒストリーのデータの中の被爆者の語りには、マリア様がよく出てきました。原爆後の記憶では、爆心地^{ばくしんち}のがれきの中にマリアのアイコンがあったり、自分たちの失われた母にマリア様を関連付けたり、聖母が反戦のイメージや祈りのためのアイコンでもあったと話しました。原爆69年後、インタビューをした、Aという被爆者が1945年、八月九日に家の焼け跡で被爆したマリア像やほかのシンボルを見つけたと言っていました。そして、これらのシンボルは記憶や証拠であると言いました。

自分の家焼けた後で、ロザリオ、とか、このマリア像とか、キリスト像焼け跡、とか出てきましたよ。だけれどね、それも、人で集め。。。得に、何と言う考えなかったね、みんな焼けてしまって、だから、大事にはしています。大切にはしていますけど、残してね。。。記憶のための、証拠品と言いますかね…

(A, 長崎原爆資料館 2014 年)

原爆のがれきの中から明らかにされたように、カトリックコミュニティはこのアーキタイプを宝物のように扱い、再^{さいかいしやく}解釈をしています。A さんがおっしゃるように、これらのものは彼、そして、他の被爆者にとっても大事なものです。

西坂の26聖人資料館には、被爆した潜伏キリシタンが大事にしたマリア観音があります。これも、そのような聖なるものの一つです。こういったものはA さんにとっても興味をそそるものであり、解釈や理解の対象でもありました。つまり、ここで明らかにされた問いは、ここに見出^{みいだ}されたマリアのあり方をカトリック集団がどのように解釈するかです。

鎖^{さこく}国の間、キリスト教は仏教や神道に追いやられましたが、潜伏の信仰はまだ続けられ、完全に消えたわけではありませんでした。観音という仏教の慈母^{じぼ}の姿がマリア観音として秘密に使われ始めたことは新しい現象^{げんしょう}でした。昔、中国で作ったグアニーンが日本の観音に変わってきました。⁸日本では、男性や、女性の姿、両性具有^{りょうせいぐゆう}を模した観音もあります。そして、よく、出産^{きがん}を祈願するために、子供と共に女性^もを模した観音が日本の観音のイメージとなっています。慈母^{じぼ}、ひぼといっ

⁸ Kannon is dealt with in the Lotus Sutra (Japanese Hokekyo), Fumon Chapter in which the Bodhisattva uses thirty-three different manifestations to bring salvation to the believer. Shinjo Mochizuki, 'The Compassionate and the Wrathful', *Japan Quarterly*; Tokyo, 13.3 (1966), 340–351 (p. 341). Jeff Wilson has noted the 'rise of Kuan-yin worship as a 'female bodhisattva' in Western regions, whose worship, he says, now is found in temples and homes in Northern America and Europe. Jeff Wilson, "'Deeply Female and Universally Human': The Rise of Kuan-Yin Worship in America', *Journal of Contemporary Religion*, 23.3 (2008), 285–306 (p. 285) <<https://doi.org/10.1080/13537900802373270>>. He writes that the Kuan-yin is attractive to women who have left Catholicism as a reminder of the Virgin Mary. (p. 289) The American insistence that she is female is 'reversing the arrow of history', says Wilson, presumably because this clashes with the Buddhist insistence that the bodhisattva is masculine. (p.290)

た女性らしさを持つ観音は“観音は情け深い^{なさけぶか}“という伝統に従^{したが}っています。慈悲^{じひ}と母性を表すシンボルです。

明治6年まで、多くのマリア像が長崎奉行に召し上げ^{めしあげ}られたので、この写真のような、残されたマリア観音の像は潜伏キリシタンにとって貴重^{きちょう}だったでしょう。江戸時代、マリア観音の像を違法^{いほう}でも使っていたことから、マリアは慈悲^{じひ}と共に、危険さも表したことが分かります。崩れあるいは、弾圧を経験した人々のなかには、慈悲^{じひ}と危険の両方の意味があったかもしれないのです。時々裏側^{うらがわ}か内側に十字架も隠されていて、キリシタンに仏教とは違うキリスト教への信仰を思い出させました。

その観音はキリシタンの信仰を助けました。そのような信仰が続いたという証拠になるものは19世紀の半ば^{なかば}に起こった出来事に見られます。浦上四番崩れの前、1857年に長崎奉行が林のきちぞうという百姓を問いいだけて、マリア観音の使い方を語らせました。彼は奉行の前で、両親から口頭^{こうとう}で習った常習や、グラシア・アヴェ・マリアを観音の前で語り、豊作^{ほうさく}、長生き、家族とパライソ（天国）へ行けることを祈りました。⁹

潜伏の信仰の中の聖母マリアの重要^{じゅうよう}さが従来^{じゅうらい}のカトリシズムには危険です。そこで、潜伏のマリオロジーを学ぶために、潜伏キリシタンのテキストを少し

⁹ Maria Reis-Habito, 'Maria-Kannon: Mary, Mother of God, in Buddhist Guise', *Marian Studies*, 47.1 (1996), p. 59.

考えていきたいと思います。^{こうとうでんしょう}口頭伝承された“天地始まりの事”の中に、Maria Reis-Habito はマルヤ（マリア）が45回書いてあること、そして、デウス（神様）が66回書いてあると示しました。¹⁰ だから、潜伏の信仰の中で、マリアが重要な意義を持っていると言えます。¹¹ ^{ふじわらけん}藤原健によると、マルヤの^{けんのう}権能は仲裁者や手伝いです。父なる神は Pater, 息子は Filio で、聖母が *Spirito Santo* です。¹² ですから、江戸の間、日本でのクリシタンの三位一体の理解では、マリアが聖霊の与えぬしだったのです。仏教徒としての姿を表にしたまま、潜伏クリシタンはマルヤに^{さんいいたい}三位一体における役割を与え、仏教とキリスト教を^{ゆうごう}融合させる形で^{じゅうそう}重層信仰を生み出したのです。

日本の潜伏クリシタンの神学の中では、マリアを聖霊と同等にしたことで、マリアの大切さが強調されました。Reis-Habito と Fujiwara は聖霊としてのマリアが spirit の力の維持や獲得に近いものであると書きました。柏原謁見によって、気と *Taich'i*、もしくは究極‘the great ultimate’は同等のものとされました。

奉行は人々に背教を示させるために、絵を踏ませて、幕府は潜伏クリシタンを発見しました。1640年から宗門改め役を設けました。踏み絵か絵踏みと言われましたが、その絵はほとんどキリストか聖母マリアの絵でした。

皮肉なことに、潜伏クリシタンは踏み絵を見ながら、自分たちの危険な^{しんねん}信念を思い出したかもしれません。クリシタンが踏み絵を足で踏んでしまうと、聖母マリ

¹⁰ Reis-Habito, p. 61.

¹¹ Reis-Habito, p. 62.

¹² Reis-Habito, p. 67.

アやキリストに^{じつぞんてき}実存的な苦しみをさせたような気がしました。毎回、聖母マリアとキリストの絵を踏んでしまったら、^{ふせいじつ}不誠実さを感じ、同時に、シンボルの意味を思い出しました。あるキリシタンは罪滅ぼしのため、踏み絵セレモニーの後で、自分たちを^{むち}鞭で^う打ったそうです。

今の浦上の市民と話すと、現在、踏み絵やマリア観音の姿が潜伏キリシタンの回復力を代表するものになったことが分かります。ある、被爆者ではない浦上の方とのインタビューがこのテーマの議論をさらに深めました。遠藤修作の沈黙という小説やScorseseの最近の映画の中に鎖国の初めの時代に踏み絵をさせられたキリシタンの描写があります。¹³その思想について浦上での長崎カトリックセンターの会員と話しました。会員さんは踏み^{つぶさ}潰されたマリアや違法なマリア観音のことを考えるために、遠藤の小説の話をしました。

踏み絵もふまなければいけなかったし。。。踏んでしまう、許してほしい、母のイメージ、そういうふうには、遠藤周作、は書いていますね。

そのマリア観音さまですね。あるいは、子安観音と言って、子供をあいている、神さまですね。それも、マリアとイエス、やはりに見てみることはできたし、まあ、みじかいそれはあったということも…観音さまマリアとみたマリア観音さまが、たくさんあの、とこう、守ってきたんじゃないかなと思う、でも、とくにその父なるの厳しさ、さばくの父ではなくて、やはり、うち許した母マリアという遠藤周作のような考え方は。。。

(役員, カトリックセンター, 2014 年)

¹³ Shusaku Endo, *Silence*, trans. by Johnson, William (New York: Taplinger Pub. Co., 1980).

遠藤は潜伏キリシタンにとって、マリア様が許しの神様を代表する存在として最も重要であると位置付けました。役員が言われたのは、長い間、潜伏キリシタンの重層信仰はキリスト教と同じことではなかったということです。しかし、踏み絵を踏んでしまっても、マリア観音のアイコンの中にある慈悲ある聖母マリアのおかげで信仰を、短い間としても、保つことができたと言っています。父なる神様のおかげと言うより、許しの母の子安観音か、観音マリアによって、潜伏キリシタンが有罪を乗り越えたというふうに考えられます。

こういう話はカトリックセンターの会員にとって少し危ないかもしれません。それは彼にとって聖母マリアと子安と呼ぶ観音がぜんぜん違うからです。 Paul McCarthy は子供と共にいる子安観音は母ではなくて、子供ができることを願う夫婦に子供を授けるための仏であると書きました。このような仏はマリアに似ているところがあるけれど、バージンでもなくて、母でもなくて、本当は、女性でもありません。それで、キリシタンの観音は母性的であるという理解は菩薩は女性ではないと考える仏教に対する破壊分子なのです。このように、西洋の伝統が和式の伝統を見咎めています。一方、観音の姿がカトリックのマリアに対して危険性をもつことになるのです。

これまで、被爆マリアを紹介させていただき、潜伏の歴史を通して、踏み絵やマリア観音の話もしながら、踏み潰されながらも許す、弾圧を受けた母マリアの記憶について話しました。今から、戦後長崎をもう一度考えてみて、踏み絵によって

踏み潰されたマリアが被爆者としての「粉々にされた」マリアに変化したと言えるのか^{こうさつ}考察します。

被爆者の B さんはインタビューで、戦後、天主堂の焼け跡で、被爆者のマリアがよく見えたと言っていました。^{つぶれたぞう}14 潰れた像も死の意味を表しました。天主堂の傷ついたマリアの像は浦上のカトリック集団と一緒に生存者や被爆者といった苦しみを受け、その存在を強め、同時に、危険な記憶としてのシンボルにもなっていました。子供の頃、B さんは毎週一回ぐらい天主堂の焼け跡で遊んだそうです。天主堂の周りの芝生で深い悲しみにある美しい傷ついたマリア様をたくさん目にしたことを思い出しました。こんなマリア像のおかげで、粉々にされた苦しみのイメージが大きくなりました。B さんは言いました。

マリアさんと。。。ずっとそこにいっぱいおったもん、いっぱいありました。。。マリアさまも予言様も。。。ヨハネとか。。。本当、きれいなマリアさまだったね。でも、ね、あまりにもかわりはっててから、ずいぶん長い間そこにあってたん、（笑い）あまりにもかわりはているから。（B さん、長崎原爆資料館、2014 年）

もう一回インタビューを聞いて、B さんが笑っていたが、マリア様がそんなに長く、そのまま壊れたことが恥ずかしいかどうか考えられます。

¹⁴ *Sempuku* and Catholic memory is different because the *sempuku* community had none or little contact with Catholic authority, whereas those *sempuku* who decided to come back to the Catholic Church have re-connected with Rome.

Gwyn McClelland © 24 June 2017, CIR, Tokyo:

Speech text not for circulation, copying, or distribution without permission of the author.

原爆投下後、マリア像は傷つき、潰れて、ケロイドの傷もあったそうです。カトリックの被爆者のCさんはマリアの首のアイコンに悲しみの表情があったといいながら、反戦と聖なる意味の両方を感じたそうです。

はい、これが特に横姫になってたんですね。感激しましたし、このマリアを見るとね。。。眼孔がこう、燃えて、この、嘆きのマリアさま、と言う感じが私が思っています。はい、戦争しはだめよ。「笑」とか、平和ってありなさいというの。。。そういうまでの変わったシンボル。。。。

(Cさん、長崎原爆資料館、2014年)

被爆マリア様のアイコンはCさんにとって、人々とともに悲しみを受けた意味もあって、平和を追求するシンボルなのです。このシンボルは、昔の慈母やマリア観音や踏み絵の思い出も思い出させ、それから、キリスト教の公然な十字架で泣く聖母マリアの話も思い出させます。Cさんにとって、マリア様は信仰の対象でもありと同時に、反戦の意味も持っているのです。

長崎でカトリックじゃない人でも、マリア様の姿に気が付いてきました。音のない浦上の風景の中では、マリアの像や浦上天主堂の焼け跡が一目瞭然だったので、美術家の上野誠と、写真家の高原至さんが興味を持って記録を続けました。¹⁵例えば、1951年に高原至さんは、天主堂の焼け跡の写真の背景に、悲しみのマリアの像が毎週、天主堂で遊んでいた被爆者の子供さんを眺める様子も写真に収め

¹⁵ See Wakabayashi and Takase for a discussion of these two artists' understanding of the remains left after the bombing. Chiyo Wakabayashi, 'When the Darkness Is Set Free: Woodcut and Ueno Makoto's Palm-Sized Series The Atomic Bombing of Nagasaki', *Inter-Asia Cultural Studies*, 13.1 (2012), 88–121 <<https://doi.org/10.1080/14649373.2012.636876>>; Tsuyoshi Takase, *Nagasaki Kieta Mō Hitotsu No 'genbaku Dōmu' / Takase Tsuyoshi* (Tōkyō: Heibonsha, 2009).

ました。マリア様の存在は原爆後の長崎では目につくものだったのです。マリア様がいたことで伝統、恵み、^{なさ}情け、心遣い、そして、聖霊や気も表されました。苦しみのマリアが浦上カトリックとともにいる参加者のような気がするのです。

山畑の一番採捕に見せた写真で分かるように、母の姿だったら、マリア様の^{じひぶか}慈悲深い^{ようす}様子が想像できます。だけれども、^{じひ}慈悲は母を失った被爆者にとって、もつとも大事なものかもしれません。深堀ジョージはマリア様の像は記憶と証拠だと言われました。しかし、何のための記憶と証拠かはわからないそうです。そして、お母さんの姿は一番惨めだったとも言いました。原爆後の浦上の音のない光景からマリア様の声が聞こえてきて、証拠や記憶となるのだとも言えるかと考察します。

原爆で母を失ったDさんは、Aさんよりも直接マリア様と彼の母を関連付けています。10人の中の一人の子供でしたが、その中でDだけが現在、生き残っていると話しました。家族のためにいつも働いたお母さんでしたが、あまり強くなかったそうです。

あの、あれだけの子供を育てるのに、配給制度、そのころはいくらかずつ、一人いくらであの、配給、お米を少しだけもらったんですね。とても、あの、育ちだかりの子供たちで足りないわけです。。。どこまでも歩きで買い物に、行って、田舎に行って、少し、本のわずかの物をあげてもらうのに、体でよく持っていて今も思います。だから、むしろ、死ぬ、死というの、恩恵と捕らえることも、もちろん根苦心の私たちからすれば、悲しいことですけど、マリアさんに呼んでくれたんじゃないか。と私が思いますね。。。あるいは、そのまま、マリア様のように、天国にそのまま行ったかもしれん。

(Dさん, 長崎資料館、2016年)

マリア様が呼んでくれれば、マリア様のように天国に「そのまま行ったかもしれん」とDさんが言っていました。ちなみに、カトリックのマリア様の被昇天と言う

祭りは原爆投下後、八月 15 日です。彼の記憶の構成は宗教の意味に対して訴えるという感情に関わっているものです。

彼の母の暴力的な死を思い出し、悲哀を感じたとしても、聖母との関連があることを考えると、積極的な結果や、希望を持つようになりました。衰弱のお母さんを思い出して、死が不幸中の幸いと解釈するようになりました。

2015 年、原爆投下 70 周年の記念に、1937 年にドイツによって爆撃されたスペインのゲルニカの教会に残ったマリアの像の頭が修復されました。その修復された像は浦上天主堂に運ばれ、展示されました。カトリックや他の長崎の市民は世界中の他の同じような経験をした人々の話との繋がりを見つけ出したそうです。

反暴力の運動の中で、カトリックも被爆マリアの新しい出現と長崎の人々の苦しみを語っています。トラウマと大虐殺の文学でも、ゲルニカ、アウッシュュイツ、長崎が繋がっているようです。¹⁶

¹⁶ For more on this topic, see the following literature, which extends on the theme of connections out of trauma. Robert Seitz Frey, *The Genocidal Temptation: Auschwitz, Hiroshima, Rwanda, and Beyond* (Oxford: University Press of America, 2004); Eric Kligerman, *Sites of the Uncanny: Paul Celan, Specularity and the Visual Arts* (Berlin: Walter de Gruyter, 2007); Max Silverman, *Palimpsestic Memory: The Holocaust and Colonialism in French and Francophone Fiction and Film* (New York; Oxford: Berghahn Books, 2013); Robin Adèle Greeley, *Surrealism and the Spanish Civil War* (New Haven; London: Yale University Press, 2006).

Gwyn McClelland © 24 June 2017, CIR, Tokyo:

Speech text not for circulation, copying, or distribution without permission of the author.

天主堂の焼け跡が取り払^{はら}われた年、1959年に、田中千禾夫の「マリアの首：長崎の幻想曲^{げんそうきょく}」という劇が初めて発表されました。¹⁷この劇の中の、「ケロイドのマドンナ」は「私たちの苦しみをいつも見守る証人」の代表です。被爆者の代表として、苦しみがわかるマリア様です。劇は夢のような感性^{かんせい}を使います。そこで使われるマリアの首の像は被爆者であり、「いつも戦^{たたか}っている平民の黒く焼けた母の顔」をしています。

Aさんが灰^{はい}の中の自分の家でマリア像を見つけたように、死の場所からマリアを取り上げたり、隠したりすることが敬虔^{けいけん}な清め^{きよ}になります。そのようにすることで、もう一度、マリア様はカトリックの希望を超越する存在になります。

現在の被爆者とのインタビューでも、マリアの首でのマリア様をもう一度所有^{しゅゆう}し神聖化^{しんせい化}することに似ている部分があります。スペインへ行った被曝マリアが浦上天主堂にまた帰ってきました。Eさんや被爆者がこのアイコンを新しく復興した祭殿^{さいでん}に置くのを指導しました。

マリアの首のドラマのように、実際、マリア様の復興は、正規^{せいぎ}の場所に返されること^{ちょうわ}が、調和^{ちょうわ}みたいだと深堀は思ったのでしょうか。彼が言っていました。

それから、分かったんですね。…それで、結局はもう、2005年に。。そこの、あれを作ったんです。あの所^{ところ}に取って置いたんですね。

¹⁷ Chikao Tanaka, David G. Goodman, and Vic) Playbox Theatre (Melbourne, *The Head of Mary : A Nagasaki Fantasia* / Tanaka Chikao ; English Translation by David G. Goodman, Current Theatre Series (Sydney : Melbourne: Currency Press ; Playbox Theatre Centre, Monash University, 1995).

Gwyn McClelland © 24 June 2017, CIR, Tokyo:

Speech text not for circulation, copying, or distribution without permission of the author.

そして、あの祭壇も、昔の祭壇の一番上にあったんですね。マリア様がマリア像はね。だから、同じような方も祭壇を作って、あそこに。。。だから、少しでも、やっぱり、前のイメージがありますからね。結局はね、祭壇でも、何でもね。だから、私は特に一番責任者でしたから。。。一応、被爆マリア、だから、そう言うことにして、ちゃんと、やっぱり、そこに置こうと言うことにしたんですね。

(Eさん, 浦上天主堂、2016年)

被曝したアイコンのため、2005年に、Eさんと浦上の信者さんが祭殿を立てました。Eさんはアイコンが元の祭壇に置かれることが重要だったと言っていました。オーストラリアの新聞記事で、Eさんが言っていたのは、「自分を犠牲にして、戦争の悲惨さを語っているようなマリア様だ」ということです。¹⁸何もわからない人のために、この実存のアイコンを復興と保存の歴史を知らせる存在としました。原爆を思い出すことも復興の一部なのです。

しかし、今のマリア像は昔のマリア像から変わってきています。写真の中に目立つ書道の「平和」の字は、新しく生まれた反戦、反原発のマリア様です。そのマリアはCさんによって伝えられた感傷^{かんしょう}を映し出し、原爆への反対を示しています。傷がある、粉々にされた被曝マリアは原爆を思い出して、惜しむ^{おしむ}のです。Eさんは「これは平和のシンボルで、いつまでも保存すべきだ。」と言いました。

浦上のキリシタン資料館も最近、このマリア像の絵を出版しました。代表は次のように書きました：

この写真は浦上の被爆マリア像です。原爆の炸裂^{さくれつ}を見た彼女の表情は無表情^{むひょうじょう}に見えますが、何も語ることができないほど悲劇の大きさを物語

¹⁸ Shingo Ito, 'Miracle Statue at Atom Bomb Site', *Sydney Morning Herald*, 8 August 2010
<<https://tinyurl.com/la77ve5>> [accessed 8 April 2017].

Gwyn McClelland © 24 June 2017, CIR, Tokyo:

Speech text not for circulation, copying, or distribution without permission of the author.

っています。でも二つのマリア像は私たちの苦しみ、悲しみに、いつも寄り添って下さっていることを教えてください¹⁹。

この私たちはUS、つまり、より広く日本の市民を含めた、次の世代「被爆者の子供と孫」、そしてカトリックじゃない人々や長崎の原子の記憶のことなのです。このマリア様は、見えない、言い難い^{がたい}、不可解なトラウマ^{ふ か かい}を伝えています。さらに、苦しみや痛みとともにいることを教えてください。ポールリクールによると、「歴史家は決して伝えることができない究極^{きゅうきょく}の経験に直面^{ちよくめん}している。しかし、言い難いといっても、言い知れぬということではない。」と書いていました。²⁰もしかして、この被曝マリアは優しさであり共に苦しむ仲間であり、浦上の語りを表しているのではないだろうかと思います。

だから、被爆者のAさんが自分の家の焼け跡でマリアの像を見つけたとき、浦上の爆心地にあるコミュニティの記憶に関わるシンボルを見つけたのです。今のカトリックの被爆者にとって、このマリア様の姿が今までの長崎での歴史的な苦しみを理解するための道を開きました。踏み絵とマリア観音は、マリア様の危険性^{きけんせい}を示し、母性で観音の男らしい特徴を見とがめたり、カトリックの家父長制をきり落としてたり、慈母観音の優しさや貫禄を表したりします。このマリア観音を思い出させるマリア様は西洋と東洋の離別も見とがめて、違いがそんなに大きくないようにしています。浦上のマリア様がキリストの十字架に対して嘆き、精霊の通り道^{とお みち}として、神様の許しのシンボルとなります。被曝マリアが被爆者のケロイドや傷と似て

¹⁹

<https://www.facebook.com/urakamicm/photos/a.1516878721861831.1073741828.1516853071864396/1668731803343188/?type=3&theater>, The author's translation

²⁰ Paul Ricœur, *Memory, History, Forgetting* (Chicago: London: University of Chicago Press, 2009), p. 452.

Gwyn McClelland © 24 June 2017, CIR, Tokyo:

Speech text not for circulation, copying, or distribution without permission of the author.

いて、まだトラウマが大変な D さんをあやしてくださるそうです。D さんも、お母さんが MARIA 様と一緒に天国へすぐ行ったかとも言っていました。

C によると、平和のシンボルである被爆 MARIA はカトリックと長崎をつなげたようでした。長崎に投下させた苦しみや死についてのアートに MARIA さまも描いて、単純に反戦でもなく、犠牲者としてのナラティブでもなく、カトリックでもないアイコノグラフィーへと変えました。東洋の MARIA として、浦上の MARIA が世界中の暴力の経験への架け橋となり、ゲルニカの粉々にされた MARIA にもつながっていきます。

田中親男さんの劇では、浦上カトリックが天主堂の焼け跡から、MARIA を解放して、あがめるための祭壇をまたたてました。おなじように、E さんの天主堂で祭壇を作り、MARIA を解放するような行動は、死にまけることに対して挑戦を仕掛けるような働きです。浦上の被爆 MARIA は敬虔な信者を励まして、平和を呼びかけ、そして、この他にはない日本のコミュニティの長い記憶を使い、パワーに対する危険な挑戦の象徴となりました。原爆後、浦上の音のない風景には、MARIA さまの姿は長崎の原爆や迫害の記憶を通してキラキラ輝くものであったのです。

Endo, Shusaku, *Silence*, trans. by Johnson, William (New York: Taplinger Pub. Co., 1980)

Frey, Robert Seitz, *The Genocidal Temptation: Auschwitz, Hiroshima, Rwanda, and Beyond* (Oxford: University Press of America, 2004)

Greeley, Robin Adèle, *Surrealism and the Spanish Civil War* (New Haven; London: Yale University Press, 2006)

Hauke, Manfred, *God Or Goddess?: Feminist Theology : What Is It? : Where Does It Lead?* (San Francisco: Ignatius Press, 1995)

Ito, Shingo, 'Miracle Statue at Atom Bomb Site', *Sydney Morning Herald*, 8 August 2010
<<https://tinyurl.com/la77ve5>> [accessed 8 April 2017]

Gwyn McClelland © 24 June 2017, CIR, Tokyo:

Speech text not for circulation, copying, or distribution without permission of the author.

- Johnson, Elizabeth A., *Dangerous Memories: A Mosaic of Mary in Scripture*, annotated edition edition (New York: Bloomsbury Academic, 2004)
- Kligerman, Eric, *Sites of the Uncanny: Paul Celan, Specularity and the Visual Arts* (Berlin: Walter de Gruyter, 2007)
- Metz, Johannes Baptist, *Faith in History and Society: Toward a Practical Fundamental Theology* (New York: Crossroad Pub. Co., 2007)
- Mochizuki, Shinjo, 'The Compassionate and the Wrathful', *Japan Quarterly*; Tokyo, 13 (1966), 340–351
- Oka, Ritsuko, 'The Motherly Presence of the Virgin Mary in the Local Church of Nagasaki', in *Asia Oceania Mariological Conference* (presented at the AOMC, Lipa City, Philippines: University of Dayton, 2009)
<<http://campus.udayton.edu/mary/VirginMaryinNagasaki.htm>> [accessed 4 May 2015]
- O'Malley, John W., *The First Jesuits* (Cambridge; London: Harvard University Press, 1995)
- Reis-Habito, Maria, 'Maria-Kannon: Mary, Mother of God, in Buddhist Guise', *Marian Studies*, 47 (1996)
- Ricoeur, Paul, *Memory, History, Forgetting* (Chicago: London: University of Chicago Press, 2009)
- Silverman, Max, *Palimpsestic Memory: The Holocaust and Colonialism in French and Francophone Fiction and Film* (New York; Oxford: Berghahn Books, 2013)
- Stahl, David C., and Mark Williams, eds., *Imag(in)ing the War in Japan: Representing and Responding to Trauma in Postwar Literature and Film*, Brill's Japanese Studies Library, v. 34 (Leiden ; Boston: Brill, 2010)
- Takase, Tsuyoshi, *Nagasaki Kieta Mō Hitotsu No 'genbaku Dōmu' / Takase Tsuyoshi* (Tōkyō: Heibonsha, 2009)
- Tanaka, Chikao, David G. Goodman, and Vic) Playbox Theatre (Melbourne, *The Head of Mary : A Nagasaki Fantasia / Tanaka Chikao ; English Translation by David G. Goodman*, Current Theatre Series (Sydney : Melbourne: Currency Press ; Playbox Theatre Centre, Monash University, 1995)
- Wakabayashi, Chiyo, 'When the Darkness Is Set Free: Woodcut and Ueno Makoto's Palm-Sized Series The Atomic Bombing of Nagasaki', *Inter-Asia Cultural Studies*, 13 (2012), 88–121 <<https://doi.org/10.1080/14649373.2012.636876>>
- Wilson, Jeff, "'Deeply Female and Universally Human": The Rise of Kuan-Yin Worship in America', *Journal of Contemporary Religion*, 23 (2008), 285–306
<<https://doi.org/10.1080/13537900802373270>>

